

# ベスユーン問題

平野 敬一



平野敬一氏

このほどR・スチュワート著『医師ベスユーンの一生』が、阪谷芳直氏のていねいな翻訳で岩波現代選書の一冊として世に出た。久しくカナダ文学におけるベスユーン問題に深い関心を抱いてきた一人として、多少の感慨なきをえない。

あれは確か一九六五年の一月。カナダCBC放送のテレビ番組でD・プリテンとJ・ケメニー共同制作のノーマン・ベスユーンの名義でドキュメンタリーが放映されるという画期的なできごとが起こった。

当時のタイム誌(カナダ版)や地元の新聞も一応この「できごと」を取り上げはしたが、なぜそれが画期的なことかという点を充分説明してはくれなかった。とにかく、当時オタワに滞在して大学でカナダ文学を講じていた私は、この番組に登場するベスユーンの名義、M・ケーンの朗読によるベスユーンの記事の引用に名状し難い感銘を受けたものだった。カナダの社会も変ってきた——ベスユーンがこのように大っぴらに紹介されるようになったのだから、私は新しい時代の曙光のようなものをこの番組(というよりこの番組が放映されたという事実)から感じとった。

というのは、当時、私はベスユーンのこと、だいたいは煮やし、もう匙を投げたいような苛立った気持ちになっていたからである。ちょうどその頃、大学で担当していたカナダ文学の講義で、私はヒュー・マクレナンの作品を扱っていたのであるが、マクレナンの近作(当時としては)『夜の終わりのとき』(一九五九)の主人公ジェローム・マルテルと実在したノーマン・ベスユーンの間接的関係をはっきり

させないことには、マクレナンの文学観や社会観をいくら論じても始まらないのではないかと苛立った思い(いまでもその思いは変わらない)から、ノーマン・ベスユーンの名義を私なりに調べ、教室でマクレナンのこの作品と関連させて解説を試みていた。そのとき逢着した有形無形のフラストレーションを、私はいまでも忘れることはできない。

自分の苛立ちについて立入る前に、マクレナンの作品を少し解説する必要がある。『夜の終わりのとき』はカナダ総督賞を取ったマクレナンの大作としてカナダではよく知られた作品であるが、多くのカナダ文学の作品の例にもれず、日本では未翻訳、未紹介なので、ここでごく大筋だけを述べてみよう——高名なモントリオールの外科医ジェローム・マルテルは、一九三〇年末に共和国側支援のためにスペインへ赴くが、ファシスト側に捕えられ、消息を絶つてから久しい。ところが一九五〇年代初期のある冬の日、マルテルは突然、モントリオールに姿を現わす。彼は、ファシスト側に捕えられたから、ドイツ、ポーランド、ロシア、中国と獄中を転々として筆舌に尽くし難い艱難を味わってきたのだ。マルテルの妻キャサリーヌは夫が死亡したものと信じ、ラジオ解説家(そしてこの作品の語り手)であるジョージ・スチュワートと再婚しているのだが、思いがけないマルテルの帰国のショックが病身にこたえ、スチュワート夫婦は重大な危機に直面する。しかし、さまざまな苦難を経て、いまや身体でなく精神の医者となったマルテルは、夫婦を助けてこの危機を乗り越

えさせ、またいざことなく立ち去っていく、という筋立てである。主人公マルテルの描写に炯眼の人は、ベスユーンの名をみるだろう。

実際の作品はマルテルの生い立ちから始まり、話をもっと屈折しているが、大筋は、ほぼ以上の通りである。再び、私の苛立ちへ戻ることにしよう。

苛立ちのきっかけとなったのは、当時のカナダの大学生のほとんど誰一人としてノーマン・ベスユーンの名前を知らなかったという、私にとっては衝撃的な事実だった。ベスユーンといっても、全然ピンと来ないのである。聞いたこともないという。一九六〇年代前半の大学生としては、それはむりのないことだったかもしれない。こんど翻訳された『医師ベスユーンの名義』の序をみると、原作者スチュワートがベスユーンに関心をもちだした一九六九年になつても、カナダ史の教科書にベスユーンの記事は一行もなかったというのだから。歴史家スチュワートにとつても、ベスユーンの名は、最初、きわめて漠然としたイメージしか喚起しなかったようである。六五年に私を感銘させたベスユーンの名義番組も、どうやらカナダの社会にあまりインパクトはなかったらしい。もともとこのんびりしたカナダの学生たちのベスユーンについての無知と無反応に私が苛立つたりしたのは、少々性急すぎたかもしれない。

私を苛立たせたのは学生たちだけではなかった。スチュワートも序文で引合ひに出しているベスユーンの名義の伝記、T・アランとS・ゴードン共著の『メスと剣』(一九五三)、「医師ノーマン

・ベスユーンの名義の偉大なる生涯」、浅野雄三訳、東邦出版社、一九七四年が参照資料としてどうしても必要なのに、一国の首都オタワでどういふわけか手に入らないのである。いまでもベスユーン復権のおかげで、同書の紙装版は容易に入手できるようになったが、当時は、ポストンとトロントで同時発行になった(はずの)この本が、大学の図書館にも市の公立図書館にも蔵されていないというお粗末さだった。ようやく国立図書館に一部あることが目録で判明し、インター・ライブラリー・ローンとやらで貸出しの手続きをとったまではよかったが、現物は私のオタワ滞在中にとうとう手もとに届かなかった。さいわい、ポストン出版のアメリカ版をトロントの古本屋でみつけることができて、なんとか当座の間合わせることはできたものの、ベスユーンの名義(しかも自国出版の)が、どうしてあのようにきれいさっぱりと本屋の書棚や図

書館から姿を消してしまつたのか、ふしぎなことだと思つた。私は、いまでも、それをたんなる偶然とは思えないのである。ベスユーンごときもの伝記、特にアランとゴードンの共著は、(わが文部省の口調を借りるなら)「公序良俗に反する」ものとみられ、事実上禁書に近い処遇を受

